

(補足)

露伴は「雲の影」の一文を鬼貫の一節を引いて結ぼうとしています。このあたり、約束の枚数が尽きたのかちよつと説明不足なので補つてみたいと思います。鬼貫は芭蕉と同時代の俳句作者で、万治元年(一六六一)四月四日生れ、元文三年(一七三八)八月二日没(因みに松尾芭蕉は寛永二十一年(一六四四)生れ元禄七年(一六九四)十月十二日没)。

大阪伊丹の人で、東の芭蕉西の鬼貫と唱えられたこともありましたが、いまではどちらかと言えば芭蕉ばかりが有名になって居ます。露伴はそのことも弁えてか、談林派を超える試みの一人として(代表者である芭蕉ではなく)鬼貫に光を当てて「雲の影」の一文を結ぼうとしていたのです。

鬼貫は「まこと」を俳諧の主旨として「まことのほかに俳諧なし」「よい歌とは詞にも巧みもなく姿に色品をかざらずさらさらと詠みながして其の心が深いもの」というような言葉を遺しています。『独り言』は彼の俳論集ともいふべき著書です。

鬼貫の句で誰もが知っているのは、
行水の捨てどころなし虫の声
でしょうか。

以下の余白に鬼貫の句をいくつか拾っておきます。

山里や井戸のはたなる梅の花

鳥はまだ口もほどけぬ初桜

雨だれや暁がたに帰る雁かり

谷水や石も歌詠む山桜

春と夏手さへ行きかふ更衣しんもがえ

夏の星影なつかしもくれかゝる

さはさはと蓮はぢすうごかす池の亀

によつぽりと秋の空なる不二の山

そよりともせいで秋立つことかいの

つくづくとももののはじまる火燧こたつ哉

山吹は咲かで蛙は水の底

人に遁にげ人に馴るゝや雀の子

灯ともしびの花に春まつ庵いほりかな